

中高年者の意志決定スタイルの特徴に関する検討

— 若年者との比較から —

Characteristic of decision-making style of middle-aged and older adults :
Comparison to young adults

田中 真理^{*}・鎌田 晶子^{**}・秋山美栄子^{***}
Mari TANAKA, Akiko KAMADA, Mieko AKIYAMA

キーワード：意志決定スタイル、中高年者、若年者、年齢差

要旨：中高年者の意志決定スタイルの特徴について、実証的に検討を行うため、中高年者および学生の2つの年齢群を対象に質問紙調査を行った。因子分析の結果、「優柔不断」、「責任回避」、「依存的决定」、「短慮」、「自己信頼的决定」の5つの因子が抽出された。さらに、両群とも自己信頼的决定が意志決定の自己評価と正の相関、他のスタイルは負の相関を示した。中高年者の意志決定の特徴として、中高年者の方が、自己信頼的决定と意志決定における自己評価が高く、優柔不断、責任回避、短慮が低いことが示され、中高年者においてより適応的な意志決定スタイルがとられるようになることが明らかとなった。短慮に関しては、他の変数との関連性に年齢差が認められたため、発達の視点から意志決定スタイルに関する考察が行われた。最後に、本研究の限界と今後の課題について議論が行われた。

序

スーパーで購入する商品を決定する、ランチのメニューを選ぶといった日常的な意志決定から、職業や結婚、転居といった人生に関わる意志決定など、われわれは、社会生活における様々な局面で意志決定を行っている。あまり迷わずに決定する人もいれば、あれこれ迷ってしまいいかなか決められない人もるように、こうした意志決定場面における意志決定のスタイルにはいくつかのタイプがある。

^{*} たなか まり 文教大学生生活科学研究所客員研究員

^{**} かまだ あきこ 文教大学人間科学部

^{***} あきやま みえこ 文教大学人間科学部

例えば Mann (1982) は、一般的な意志決定スタイルとして、解決方法が得られると確信し、考えられる選択肢を十分に検討する「熟慮」、決断を引き延ばしたり他者に責任を転嫁したり、合理化するなどによって葛藤を回避しようとする「防衛的回避」、適切な検討を行うための時間が十分でないと思ってしまう最も不快感を与えないと思われるような選択肢を性急に選択してしまう「短慮」の3つを意志決定スタイルと位置づけ、これらを測定する Flinders Decision-Making Questionnaire (DMQ) を開発した。他にも、「熟慮」、「責任転嫁」、「優柔不断」、「短慮」の4つの意志決定スタイルが測定可能な Decision-Making Questionnaire II (DMQ II; Mann, Burnett, Radford, & Ford, 1997) や、DMQ (Mann, 1982) を改訂した意志決定行為質問紙 (Decision Behaviour Questionnaire, DBQ; Radford・Mann・太田・中根, 1989) も開発されている。DBQ (Radford 他, 1989) は「熟慮」、「自己満足」、「防衛的回避」、「短慮」の4つの意志決定スタイルと、さらに意志決定に関わる自己評価 (自尊感情) も測定可能であり、日本語版にも翻訳されている。

こうした意志決定スタイルは、パーソナリティや文化等の社会心理的要因との関連が指摘されている。また心理的適応という観点から、自尊心、ストレス等の適応変数や、精神障害や強迫神経症、うつ病などの気分障害といった精神病理学的指標を用いていくつかの実証的研究がおこなわれている (ラドフォード・中根, 1991)。

これまでの先行研究から、意志決定スタイルのうち、「熟慮」は意志決定の自己評価 (Burnett, 1991; Deniz, 2006; Radford 他, 1989) や人生満足 (Deniz, 2006) と正の関連性があり、意志決定におけるストレスとは負の関連 (Radford 他, 1989) があることが明らかとなっている。一方、それ以外の「自己満足」、「防衛的回避」、「短慮」、「責任転嫁」、「優柔不断」はいずれも自己評価と負の相関 (Burnett, 1991; Deniz, 2006; Radford 他, 1989)、ストレスと正の相関 (Radford 他, 1989) が有意であることが示されている。これらの知見から、意志決定スタイルのうち熟慮のみが自己評価やストレスといった内的な適応においては最も適切で、一方それ以外の意志決定スタイルは不適応的であることが示唆されている。Heredia, Arocena, & Gárete (2004) は、DMQ II (Mann, et al., 1997) を用いて、葛藤解決スタイルという観点から検討しており、「短慮」、「責任転嫁」、「優柔不断」は他者と協同しながら解決していく協調的葛藤解決スタイルと負の相関、さらに「責任転嫁」、「優柔不断」は回避的解決スタイルと正の関連性が示されている。

では、意志決定スタイルにはどのような要因が影響しているのか。パーソナリティとの関連については、「熟慮」者は、社交的、情動安定性が高く、自己制御力、リラックス、そして誠実との関連が高く、それ以外の不適切な対処パターンを示す者は、内向性、情動不安定、控えめ、恥ずかしがり、想像的、自己満足的、緊張感の高さとの関連を示しており、パーソナリティにおいても適切な熟慮と、不適切なパターンでは関連性が反転することが明らかとなっている (Radford 他, 1989)。パーソナリティだけではなく、Mann, Radford, Burnett, Bond, Leung, Nakamura, Vaughan, & Yang (1998) は、文化的な視点から、意志決定のスタイルと意志決定に関する自己評価に関する比較を行っている。その結果、「熟慮」に関する文化差はないが、アジア圏の学生は西洋圏の学生よりも回避型や短慮型の決定スタイルの得点が高く、さらに、日本人学生は、最も自己決定に関する自己評価が低く優柔不断スタイルや短慮スタイルにおいて最も得点が高かったことが明らかになっている。すなわち、日本人学生は意志決定スタイルが国際

的にみて不適応な傾向があり、さらには自己評価も低いことが示されたといえる。しかしながらこうした結果に対し、欧米と日本人の意志決定行為のスタイルの相違に対する指摘もなされている。Radford 他（1989）は、オーストラリア人との国際的比較を行い、日本人にとっての意志決定行為は、葛藤を解消するためのものではなく、集団調和をもたらすためのものであるという考察を行っている。さらに土居の「甘え」理論から、日本人の意志決定の特徴として依存的なパターンの存在を示唆し、西欧人に特徴的な個人志向的熟慮型パターンが少なくなると予想している。この指摘は、日本人独自の決定スタイルの存在を言及しているものと考えられる。しかしながら、これに関する実証的な検討はほとんどなされてはいない。

適応的な意志決定スタイルの採用に影響する別の要因として、年齢が考えられる。例えば Worthy, Gorlick, Pacheco, Schnyer, & Maddox（2011）は、意志決定と年齢差に関して実験法を用いて検討し、年配者と若年者では意志決定状況へのアプローチが基本的に異なることを明らかにしている。すなわち、年配者の方が選択肢についての長短を適切に判断することができるとしており、その背景の要因として高齢者が最適な決定に至るまでに洞察と知恵を会得しているためであると考察している。Sternburg（1985）は知恵の要素のひとつの側面として、判断力や情報の活用といった意志決定に関わる能力を位置づけているが、Worthy et al.（2001）の知見はまさに、年齢が高くなるほど、知恵と称される判断能力がより優れることを示しているといえる。こうした知見から、年齢が高くなるほど、意志決定のスタイルも、より適切に変化していくと考えられる。しかしながら、これらの知見は実験的アプローチにおいて検討されてはいるものの、社会生活や日常生活における意志決定スタイルに関する年齢の影響について、わが国ではほとんど検討されていない。

特に、中高年期の社会生活における意志決定スタイルに関する年齢の影響を検討することは、知恵や成熟といった生涯発達の視点からも、重要な知見となると考えられる。そこで本研究では、中高年者の意志決定スタイルの特徴について、学生群との比較から実証的に検討することを目的とする。

1. 方 法

（1）調査対象者

本調査では、中高年群と学生群の2つの年代群を対象に調査を実施した。中高年群では、関東圏内在住で、老人大学・大学院の受講生、福祉センター利用者および社会参加活動（サークル）に参加している中高年者に調査を依頼した。大学生の調査対象者では、埼玉県内の大学生を対象に調査を依頼した。調査用紙の回収数は、中高年者が381部、大学生が300部であった。

中高年者では、50歳代以上でかつ回答に不備のない259名を、また大学生では、10-20歳代でかつ回答に不備のない276名を分析対象者とした。分析対象者の内訳を表1に示した。

表 1 分析対象者の内訳

	中高年 (N=259)	学生 (N=276)
平均年齢	67.51 ± 5.63 歳 レンジ：51-84	19.6 ± 1.08 レンジ：18-25
男性	102 (39.38%)	75 (27.17%)
女性	157 (60.62%)	201 (72.83%)
同居有	225 (86.87%)	112 (40.58%)
無	34 (13.13%)	164 (59.42%)

(2) 手続き

調査は個別無記名式の質問紙にて実施された。中高年者は、老人大学、福祉センター及びサークルなど社会参加活動の開催場所にて調査用紙を配布した。配布した対象者のうち、協力の得られた対象者に各自持ち帰って記入してもらい、後日回収を行った。また、期間内に質問紙を回収することが不可能な対象者には、その場で回答してもらった。大学生は、授業中に調査用紙を配布し、回答後提出してもらった。実施期間は、2011 年 10 月から 12 月までであった。

倫理的配慮として、表紙に研究の大まかな趣旨を説明し、研究協力は任意であること、協力しないことによって何らかの不利益は被らないこと、プライバシーの保護、データは統計的に処理され個人の特長や公表はしないことを明記し、質問紙の提出をもってこれらに同意したこととした。さらに中高年者用の質問紙では、文字サイズを大きくし、日常生活でなじみがないと判断される漢字にはふりがなをふり、回答しやすいように配慮した。

(3) 調査項目

フェイスシート：性別、年齢、同居家族の有無と内訳を尋ねた。また日頃の食料品の買物についての項目を設け、一週間の買物の頻度、買物に行く店舗の種類、買物への交通手段、さらに主観的年齢についても尋ねたが、本稿ではこれらの項目は取り上げないこととする。

意志決定スタイル：意志決定スタイルを測定する尺度として、個人が意志決定を行う時の方法を測定する意志決定の対処スタイル尺度 (Radford 他, 1989) を用いた。本尺度では、「自己満足」、「優柔不断」、「短慮」、「熟慮」の 4 つの下位尺度が測定可能とされる。さらに、Radford 他 (1989) の指摘をうけ、依存的決定スタイルについても検討を行うこととした。依存的決定スタイルを測定する尺度として Scott & Bruce (1995) の意志決定スタイル尺度の下位尺度を用いた。Scott & Bruce (1995) は情報収集したり選択肢に関して論理的に評価する合理的スタイル、直感や感情で意志決定する直観的スタイル、アドバイスや他者からの導きを求める依存的スタイル、決定を引き延ばそうとする回避的スタイル、できるだけ早く決定を終わらせようとして即断する自発的スタイルの 5 つのスタイルを想定した。さらにそれらを測定するツールである GDMS (General Decision-Making Style Inventory) を開発している。この尺度に関しては、日本での実証的な検討はほとんどみあたらないが、イタリアにおいては適用可能であることが実証されている (Gambetti, Fabbri, Bensi, & Tonetti, 2008)。本調査では、この 5 下位尺度のうち、依存的スタイルを使用し、実施においては、

筆者らが翻訳したものを用いた。項目数は、意志決定の対処スタイル尺度の各下位尺度 6 項目に、依存的スタイル 5 項目を加えて、計 29 項目、4 件法であった。

意志決定に関する自己評価：Radford・Mann・太田・中根（1989）の意志決定に関する自己評価を測定する尺度、6 項目、4 件法を用いた。先行研究ではある程度の内的一貫性が確認されている（Radford 他, 1989）。

解析ソフト：解析には SPSS 16.0 と Amos16.0 を用いた。

2. 結 果

（1）因子構造の検討

まず、意志決定スタイルの因子構造について検討を行った。本研究の目的は、中高年者と学生の意志決定スタイルに関する世代間比較を行うであったため、両群の共通の因子を抽出する必要がある。したがって中高年と学生の両群を併せて、先行研究の因子構造モデルの適合度指標を算出した。その結果、 $\chi^2(367) = 1282.69$ ($p < .01$), GFI=.71, CFI=.69, RMSEA=.10 と当てはまりが悪かったため、改めて探索的因子分析を行い、因子構造について検討をおこなうこととした。

意志決定スタイルの項目について、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。因子分析の結果、因子負荷量が .35 未満の項目および複数の因子に .30 以上の高い負荷量を示した項目を削除して再度因子分析を行った結果、解釈可能性から 5 因子が最も適切と判断された。因子分析によるパターン行列および因子間相関行列を表 2 に示す。

第 1 因子は、「素早く決定しなくてはいけないのに、私はすぐには考えられない」「意志決定をしなければならない時、私はその事を考えるまでにかなりの時間がかかる」「私は決定をひきのばす」などの 6 項目で負荷量が高かった。Radford 他（1989）の短慮や防衛的回避などの項目から構成されていたが、項目の内容から意志決定を迫られると即断が困難で、考えがすぐにまとまらない意志決定スタイルであると考えられたため、因子名を「優柔不断」と命名した。第 2 因子は、「私は自己の問題にしたくないので、決定は人に任せてしまう」「私は変わっていると思われるから、他の人の選択に任せたい」「私は決定を人任せにしたがる」などの 6 項目で負荷量が高かった。この因子は、Radford 他（1989）の防衛的回避や自己満足などの項目から構成されていたが、項目の内容から、決定責任を他者にゆだね、責任を回避する決定スタイルであると考えられたため因子名を「責任回避」と命名した。第 3 因子は、「重要な決定をするときには周りの人からアドバイスをもらう」「重要な決定をする時は、周りの人に相談する」「重要な決定をする時、周りの人の援助を必要とすることが多い」などの 4 項目で負荷量が高く、決定の際に他者からのサポートを求める意志決定のスタイルであることから、因子名を「依存的決定」と命名した。第 4 因子は、「ささいな事をもとにして、私は決めてしまう」「意志決定する時、私はまず最初に心に浮かんだものに決めがちである」「私はよく考えないで決めてしまいがちである」の 3 項目で負荷量が高く、様々な側面から検討して決定するのではなく、あまり深く考えずに決定するスタイルであることから、因子名を「短慮」と命名した。最後の第 5 因子は、「私が決定をくださった時は、最良の決定をしたと感じる」「私はいったん決定したら、もう気持ちを変えない」の 2 項目で負荷量が高く、Radford 他（1989）の熟慮尺度に該当する項目の一部で構成され

ている。項目内容を検討すると、熟慮して決定を下すというよりも、自己信頼に基づく意志決定であると考えられることから「自己信頼的決定」と因子名を命名した。

表2 意志決定スタイルにおける探索的因子分析結果

(主因子法・プロマックス回転) と因子間相関 (N = 535)

	パターン行列 (a)				
	因子				
	F1	F2	F3	F4	F5
F1: 優柔不断 ($\alpha = .87$)					
b17_ 素早く決定しなくてはいけないのに、私はすぐには考えられない	.88	-.02	-.06	.05	.07
b16_ 意志決定をしなければならない時、私はその事を考えるまでにかなりの時間がかかる	.82	-.15	.06	.03	.04
b 3_ 素早く意志決定しなくてはいけない時、私はどうしてよいか分からなくなってしまう	.76	.15	-.04	-.03	.02
b 7_ 私は決定をひきのばす	.69	.09	-.07	-.10	-.01
b12_ 意志決定する時、私はひどく時間に追われているように感じる	.69	-.06	.03	.04	.00
b 6_ 意志決定にあたって、私はさほど努力しなくてもできる*	-.55	.09	-.05	.05	.26
F2: 責任回避 ($\alpha = .84$)					
b11_ 私は自己の問題にしたくないので、決定は人に任せてしまう	.08	.80	-.06	.01	.04
b24_ 私は変わっていると思われたくないから、他の人の選択に任せたがる	-.15	.75	.04	.16	.03
b20_ 私は決定を人任せにしたがる	.08	.69	.03	.05	-.07
b 1_ 意志決定をしなくてはいけない時、私は他の人の意見に従う	.03	.62	.10	-.09	.08
b23_ 私は自分自身で意志決定したい*	.16	-.60	.07	.16	.18
b25_ 私は意志決定の責任を取りたくない	.19	.55	-.03	.04	.00
F3: 依存的決定 ($\alpha = .81$)					
b26_ 重要な決定をするときには周りの人からアドバイスをもらう	-.07	-.14	.92	.05	-.07
b21_ 重要な決定をする時は、周りの人に相談する	.00	.03	.81	-.06	.03
b15_ 重要な決定をする時、周りの人の援助を必要とすることが多い	.22	.25	.49	.01	.03
b29_ 周りの人に支持してもらえると、重要な決定がしやすくなる	.06	.12	.45	-.05	.02
F4: 短慮 ($\alpha = .55$)					
b27_ ささいな事をもとにして、私は決めてしまう	.08	-.03	.02	.61	-.11
b19_ 意志決定する時、私はまず最初に心に浮かんだものに決めがちである	-.08	-.08	.02	.57	.15
b14_ 私はよく考えないで決めてしまいがちである	.00	.14	-.11	.46	-.10
F5: 自己信頼的決定 ($\alpha = .59$)					
b18_ 私が決定をくだした時は、最良の決定をしたと感じる	.02	-.08	.04	-.02	.67
b 9_ 私はいったん決定したら、もう気持ちを变えない	-.04	-.02	-.10	-.02	.54
※は逆転項目を示す	因子行列相関				
	F1	.66	.57	.28	-.49
	F2		.40	.35	-.54
	F3			.09	-.30
	F4				-.03

各因子の内的整合性を検討するために、クロンバックの α 係数を算出したところ、第1因子は.87、第2因子は.84、第3因子は.81、第4因子は.55、第5因子は.59となった。第4因子と第5因子でやや低い値がみられたが、尺度の棄却基準(村上, 2006)には達していなかったことから、将来的に修正・改訂することも視野に入れつつ、本研究においてはこれらの因子を採用することとした。

さらに、これらの因子構造について、中高年群および学生群の両群と全体におけるモデルの適合度指標を算出するため、確認的因子分析を行った(表3)。その結果、いずれの群においてもGFI、CFI、RMSEAともに先行研究の因子モデルの適合度指標と比較すると良好な値を示し、

ある程度許容される因子モデルであることが示された。したがって、本研究においては、この因子モデルを採用することとした。

表 3 確認的因子分析による各群および全体の適合度指標

	χ^2 値	df	p	GFI	CFI	RMSEA
中高年	322.59	180.00	.00	.89	.91	.06
学 生	368.52	180.00	.00	.89	.91	.06
全 体	691.10	360.00	.00	.89	.91	.04

次に、意志決定に関する自己評価尺度について主成分分析を行ったところ、負荷量がいずれも .40 以上であったため、本尺度の一次元性が確認された（表 4）。また、クロンバックの α 係数を算出したところ、.84 となり十分な内的整合性が確認された。

表 4 意志決定に関する自己評価に関する主成分分析結果

	主成分負荷量
意志決定に関する自己評価 ($\alpha = .84$)	
a1_ 私は意志決定の能力に自信がある	.78
a3_ 私はうまく意志決定していると思う	.74
a4_ 私が意志決定しようとする自信をなくして決められなくなってしまう*	-.61
a5_ 私の決断はよい結果を生んでいる	.58
a2_ 私は意志決定について、ほとんどの人より劣っていると思う*	-.57
a6_ 他人から「あなたの判断よりも私の判断の方が正しい」と言われると、私はすぐに納得してしまう*	-.48

※は逆転項目を示す

（2）意志決定スタイルの各下位尺度および意志決定に関する自己評価の相関分析

中高年群と学生群ごとに、意志決定スタイルの各下位尺度および意志決定に関する自己評価との相関係数を算出した（表 5）。その結果、両群に共通して「優柔不断」、「責任回避」、「依存的決定」、「短慮」は自己評価と有意な負の相関を示し、「自己信頼的決定」は有意な正の相関を示した。すなわち、自分の決定に自信があるほど、自己評価が高くなり、一方、決定や責任を回避したり、他者依存的な決定をしたり、あまり深く考えずに決定をするほど、自己評価が低くなることが示された。

表5 意志決定スタイルの下位因子および意志決定への自己評価との相関係数

	意志決定スタイル					自己評価
	優柔不断	責任回避	依存的決定	短慮	自己信頼的決定	
意志決定スタイル						
優柔不断		.59 **	.48 **	.26 **	-.25 **	-.59 **
責任回避	.45 **		.38 **	.33 **	-.33 **	-.59 **
依存的決定	.40 **	.32 **		.16 **	-.15 *	-.35 **
短慮	.01	.14 *	-.13 *		-.08	-.21 **
自己信頼的決定	-.28 **	-.41 **	-.20 **	.07		.38 **
自己評価	-.64 **	-.61 **	-.29 **	-.13 *	.41 **	

* $p < .05$, ** $p < .01$ 右上に中高年群 ($N=259$)、左下に学生群 ($N=276$) の相関係数を示す

一方、「短慮」に関しては、中高年群と学生群で関連が異なることが示された。「短慮」と「優柔不断」との関連は、中高年群では正の相関 ($r=.26, p<.01$) であったのに対し、学生群では有意な相関は見られなかった ($r=.01, ns$)。両群の相関係数の同等性について検討を行った結果、相関係数が有意に異なることが示された ($\chi^2(1)=9.01, p<.01$)。また「短慮」と「依存的決定」との関連においても、中高年群では正の相関 ($r=.16, p<.01$) であったのに対し、学生群では有意な負の相関が見られた ($r=-.13, p<.05$)。両群におけるこれらの変数間の相関係数の同等性について検討を行った結果、相関係数が有意に異なることが示された ($\chi^2(1)=11.43, p<.01$)。すなわち、中高年にとって短慮は、決定における優柔不断さや他者依存的決定スタイルとの関連が見られるが、学生にとってはあまり深く考えない短慮的なスタイルをとるほど、他者に依存しない傾向にあることが示され、優柔不断さとは関連がないことが示された。

(3) 意志決定スタイルおよび自己評価における年代の差の検討

本研究の目的のひとつは、中高年者の意志決定スタイルの特徴について学生との世代比較を行うことであった。そこで、意志決定スタイル得点および意志決定に関する自己評価の各下位尺度得点が中高年群と学生群で差がみられるかについて年齢を独立変数としたt検定を行った(表6)。その結果、意志決定スタイルの下位尺度においては、「優柔不断」($t(533)=15.05, p<.01$)、「責任回避」($t(521.31)=8.51, p<.01$)、「依存的決定」($t(533)=10.11, p<.01$)、「短慮」($t(533)=4.03, p<.01$)においては学生群の方が中高年群よりも有意に得点が高く、「自己信頼的決定」($t(533)=-9.69, p<.01$)のみ中高年群の方が有意に高かった。意志決定に関する自己評価も、中高年群の方が有意に学生群より高いという結果となった($t(506.68)=-14.41, p<.01$)。

表6 年齢を独立変数とした意志決定スタイルおよび自己評価の平均値の差

	中高年 (N=259)	学生 (N=276)	t 値
意志決定スタイル			
優 柔 不 断	12.61 (3.47)	17.21 (3.60)	15.05 **
責 任 回 避	10.52 (3.11)	13.09 (3.86)	8.51 **
依 存 的 決 定	10.68 (2.35)	12.73 (2.35)	10.11 **
短 慮	6.42 (1.66)	7.01 (1.70)	4.03 **
自己信頼的決定	5.86 (1.28)	4.78 (1.30)	-9.69 **
自 己 評 価	18.88 (2.65)	14.98 (3.57)	-14.41 **

** $p < .01$

3. 考 察

(1) 意志決定スタイルの構造について

意志決定スタイルの構造を検討するため、因子分析を行った結果、「優柔不断」、「責任回避」、「依存的決定」、「短慮」、「自己信頼的決定」の5つの因子が抽出された。特に、「優柔不断」、「責任回避」、「短慮」は、先行研究の意志決定スタイルとある程度共通する概念であると考えられる (e.g., Mann, et al., 1997; Radford 他, 1989)。また「自己信頼的決定」の項目は、Radford 他 (1989) の熟慮因子の項目の一部から構成されていることから、先行研究と一部一致した結果が再現されたといえる。「依存的決定」は先行研究 (Scott & Bruce, 1995) と項目内容が一致した因子であり、この因子は、Radford 他 (1989) が指摘した日本人に特徴的な意志決定スタイルとしての他者への依存や甘えに関する項目から構成された。したがって、Radford 他 (1989) の日本人特有の依存的決定スタイルが実証的に示されたといえる。

さらに意志決定の自己評価との関連については、中高年群、学生群ともに「自己信頼的決定」が高いほど自己評価が高く、「優柔不断」、「責任回避」、「短慮」が高いほど自己評価が低いことが示され、先行研究と一致した結果となった (e.g., Burnett, 1991; Deniz, 2006; Radford 他, 1989)。すなわち、この意志決定スタイルと自己評価との関連性は、年齢に関わらず共通したものであることが示された。

一方、「依存的決定」に関しても自己評価との有意な負の関連が示された。竹澤・小玉 (2004) は、日本人大学生を対象に依存性と意志決定の自己評価の関連について検討しており、他者への依存性が高い方が、意志決定における自己評価が低くなることを明らかにしている。本研究の結果も、この知見を支持するものであると考えられる。

しかしながら、本研究では、どの意志決定スタイルが適応的、不適応的かについては、意志決定に関する自己評価との関連性の結果から示唆されるに留まる。今後は、ストレスや自尊感情、

人生満足といった心理的適応に関する指標などとの関連について検討を行い、それぞれの意志決定スタイルの適、不適についてより詳細に検討していく必要があるであろう。

(2) 意志決定スタイルおよび自己評価における年齢差の検討

各意志決定スタイルの得点を中高年群と学生群で比較したところ、中高年群は学生群よりも「自己信頼的決定」であるより適応的な意志決定スタイルをとる一方、「優柔不断」、「責任回避」、「短慮」といった不適応的な意志決定スタイルをとらないこと、さらに意志決定に関する自己評価も中高年群の方が高いことが明らかになった。すなわち、実験的検討において指摘されていた意志決定スタイルの年齢差 (Worthy, et al., 2011) が、社会生活における意志決定行為においても確認されたといえる。

一方、中高年にとって短慮的スタイルは、決定における優柔不断さや他者依存的決定スタイルとの関連が見られるが、学生にとっては短慮的なスタイルをとるほど、他者に依存しない傾向にあることが示され、さらに優柔不断さとは有意な関連がないことが示された。この結果は、短慮的スタイルが中高年と学生とで異なる性質を持つ可能性を示している。

まず、短慮と依存的決定との関連について考察する。本研究の結果では、学生にとってはあまり深く考えずに決定するほど、周囲にアドバイスや意見を求めるのではなく独力で決定することを意味している。これは、大学生を対象とした Heredia, et al (2004) の知見を支持する結果でもあると考えられる。一方、中高年群においてはこれらの変数の関係性が反転する結果となった。つまり、年齢が若いうちは、あまり深く考えずに決断する決定スタイルが、自己完結的行為としておこなわれるのに対して、中高年期になると他者依存的な行為として結びつくと考えられる。では、短慮と優柔不断との関連についてはどうだろうか。中高年者は短慮と優柔不断が有意な関連があったが、学生は有意な相関は認められなかった。この場合の優柔不断は、時間的切迫感によってもたらされる決定困難を意味するが、中高年者の場合、決定困難である優柔不断が、決定による葛藤からの回避的アプローチとして機能するため (Heredia, et al., 2004)、あまり深く考えずに決定スタイル (短慮) と関連を持つのではないかと考えられる。逆に学生にとって短慮は、あまり深く考えない即断的な決定スタイルであり、中高年のように決定回避的な意味は持ち合わせないと考えられる。しかしながら、この点に関しては本研究では推測の域を出ない。今後は、短慮と同時的決定スタイル (e.g., Scott & Bruce, 1995) などの他の決定スタイルとの関連について改めて検討していく必要がある。

最後に依存的決定について考察を試みる。中高年期になると、なぜ短慮と依存的決定スタイルが関連し、依存的決定が決定回避として機能するのか。考えられる要因として、意志決定に関する自己認識の正確さと意志決定場面の特徴が挙げられる。Kovalchika, Camererb, Gretherb, Plottb, & Allmanc (2005) は高齢者と若年者に判断実験課題を実施し、両群におけるパフォーマンス自体は年齢差があまりなかった一方、若年者と比較して高齢者の方がメタ知識的評価が非常に正確であり、自分の知識や限界を高齢者の方がより正確に認識できていることを示した。つまり自己認識能力に関しては、学生群よりも中高年群の方が優れているといえる。竹澤・小玉 (2004) は、自分の能力において足らない部分を他者に依存することで補うということが一般的な対人関係における依存の適応的機能であると考察しており、自分の意志決定が未熟であると判断した場合は、他者依存的なスタイルが機能すると主張している。中高年者の場合、学生よりも

自己認識能力が発達しているため、決定回避時に他者依存的決定スタイルに従事する傾向が高まるのではないかと考えられる。

もうひとつの要因として、意志決定場面の特徴が考えられる。本調査では意志決定場面を具体的に限定していないが、自分の今後についての意志決定を想定するように教示した。このような場合、一般に、学生の意志決定場面は、キャリア選択や人生設計といった比較的個人的な問題が多いが、中高年が経験しやすい意志決定場面は、個人的問題以上に、家族や地域、仕事などのより複雑で幅広い社会的問題が関連することが多いと考えられる。したがって、学生よりも中高年者の方が、意志決定への責任が重大になる傾向があり、自己決定を回避したい場合に、その責任を自分一人で負う自己完結型で決断するよりも他者へ依存することで責任を分散させるというスタイルを取るようになるのではないかと考えられる。学生よりも中高年者の方が、短慮と責任回避の関連性が強い（ $\chi^2(1)=5.49, p<.05$ ）ことから、高齢者の方が意志決定における責任をより認識している可能性があることがうかがえる。しかしながら Johaston, Eriskell, & Salas (1997) は、かならずしも短慮が不適切なスタイルとは限らないことを指摘しており、日常生活に近い実験課題では、より精緻化された分析をするための余裕がなく、逆に短慮が適応的に機能することを明らかにしている。今後は、意志決定場面を限定し、特定場面における意志決定スタイルのあり方や適応性などについて、より詳細に検討していくべきであろう。

(3) 本研究の限界と今後の研究課題

まず、本研究では、意志決定スタイルの適、不適について意志決定の自己評価という観点からの検討に留まる。今後は、ストレスなどの心理的適応との関連について実証的に検討していく必要があるであろう。また、本調査では学生群と中高年群という2つの年齢群のみの横断調査による検討に留まるが、短慮因子のように年齢差の影響を受ける可能性がある意志決定スタイルがどのようなプロセスを経て変化していくのかについても検討していく必要があるであろう。

さらに、尺度の問題として、信頼性係数が低い因子があることが挙げられる。今後は、項目を追加し、より内的整合性の高い尺度を作成していく必要があるであろう。本調査で使用した尺度の原版は大学生用に開発されたものであるため、中高年者が回答しやすい項目内容、回答形式などを検討していく必要がある。特に、4件法への理解困難により回答を拒否した高齢者も存在したため、3件法での実施など、対象者の認知的負荷を軽減させた工夫が必要になってくると思われる。

引用文献

- Burnett, P. C. (1991) Decision-making style and self-concept. *Australian Psychology*, 26, pp.55-58
- Deniz, M. E. (2006) The relationships among coping with stress, life satisfaction, decision-making styles and decision self-esteem; An investigation with Turkish university students. *Social Behavior and Personality*, 34, pp.1161-1170
- Gambetti, E., Fabbri, M., Bensi, L. & Tonetti, L. (2008) A contribution to the Italian validation of the general decision-making style inventory. *Personality and Individual Differences*, 44, pp.842-852
- Heredia, R. A. S., Arocena, F. L. & Gárete, J., V. (2004) Decision-making patterns, conflict styles, and self-esteem. *Psicothema*, 16, pp.110-116
- Johnston, J. H., Driskell, J. E., & Salas, E. (1997) Vigilant and hypervigilant decision making. *Journal of Applied Psychology*, 82, pp.614-622
- Kovalchika, S., Camererb, C. F., Gretherb, D. M., Plottb, C. R., & Allmanc, J. M. (2005) Aging and decision making: A comparison between neurologically healthy elderly and young individuals. *Journal of Economic Behavior & Organization*, 58, pp.79-94
- Mann, L. (1982) Decision Making Questionnaires I & II . unpublished questionnaires. The Flinders University of South Australia
- Mann, L., Burnett, P., Radford, M. & Ford, S. (1997) The Melbourne decision-making questionnaire: An instrument for measuring patterns for coping with decisional conflict. *Journal of Behavioral Decision Making*, 10, pp.1-19
- Mann, L., Radford, M., Burnett, P., Bond, M., Leung, K., Nakamura, H., Vaughan, G. & Yang, K. (1998) Cross-cultural differences in self-reported decision-making style and confidence. *International Journal of Psychology*, 33, pp.325-335
- 村山宣寛 (2006)『心理尺度のつくり方』北大路書房
- ラドフォード, M. H. B.・中根允文 (1991)『意志決定行為 — 比較文化的考察 —』ヒューマンティワイ
- Radford, M. H. B.・Mann, L.・太田保之・中根允文 (1989)「個人の意志決定行為と人格特性 (第1報) — ある大学の学生を対象として —」『実験社会心理学研究』28 pp.115-122
- Scott, S. & Bruce, R. A. (1995) Decision-making style: The development and assessment of a new measure. *Educational and Psychological Measurement*, 55, pp.818-831
- Sternberg, R. J. (1985) Implicit theories of intelligence, creativity, and wisdom. *Journal of Personality and Social psychology*, 49, pp.607-627
- 竹澤みどり・小玉正博 (2004)「青年期後期における依存性の適応的観点からの検討」『教育心理学研究』52 pp.310-319
- Worthy, D. A., Gorlick, M. A., Pacheco, J. L., Schnyer, D. M. & Maddox, W. T. (2011) With age comes wisdom: Decision making in younger and older adults. *Psychological Science*, 22, pp.1375-1380